スローガン　「　深まろう　高まろう　つながる会員　つながる大学」
～新しい時代にふさわしい　豊かな活動を～

『豊かな教育を考える会』

目の前の子どもがすこやかに育つために今わたしたちができること

～ 学校の「あたりまえ」とは何だろう？ 考えてみませんか ～

１　日　時　　2025年11月22日（土）
　　12：50～16：00
２　会　場　　横浜国立大学
　　常盤台キャンパス
３　次　第
　開会のことば
　友松会会長挨拶
　教育学部長挨拶（教育学部長;鈴木 俊彰）
　第一部　映画「夢見る校長先生」鑑賞
　第二部　講演
　第三部　グループディスカッション
　閉会のことば

４　趣旨説明

テーマに掲げた「目の前の子どもがすこやかに育つ」は、私たちが常に願っていることです。しかし、子どもたちの置かれた厳しい生活環境や教員の長時間労働など、学校教育が抱える困難な問題の解決がなかなか見通せていないのも現実です。本年の「豊かな教育を考える会」は、昨年に引き続き「すこやかに育つ」をキーワードとしました。更に、子どもたちが「すこやかに育つ」場面を「学校全体の取り組みや気づき」という視点から考えていきたいと思います。第一部として、映画「夢見る校長先生」を鑑賞します。この映画では６人の校長先生方がいわゆる「学校のあたりまえ」を見直し「校則ゼロ」「通知表廃止」「宿題ゼロ」などの学校を実現したドキュメンタリー映画です。この映画の中で教育評論家の尾木直樹氏が「校長の権限」を強調する部分があり、この言葉だけをとらえると、神奈川県の公立学校の実態とは少しかけ離れた印象をもつ参加者もいると思います。もとより公立学校の教育活動は、各種法令に則り校長と教職員が教育課程全般について協議し共通理解を図りながら進めていくものです。

第二部では、そのあたりの誤解の解消を含めて、映画に出演していた前友松会副会長の國分一哉氏に茅ヶ崎市立香川小学校での実践についてお話していただきます。

第三部、グループディスカッションでは、世代の異なる参加者が感じた「学校のあたりまえ」の小さな気づきを元に「子どもが健やかに育つ」ために「今私たちができること」を話し合います。常に子どもたちや保護者・地域、さらに同僚の教職員から学び続け、前例にとらわれることなく、当たり前を見直しながら子どもたちの健やかな成長を共に支える「教職の魅力」や「豊かな教育」について考える機会にしていきたいと考えます。あわせて、この会が教師を目指す大学生や若手教員を励まし、応援する場としたいと思います。

（研修部長;吉田正彦）

５　次　第
開会のことば　庄子　甲子 副会長
友松会会長挨拶　藤馬　享 会長

「豊かな教育を考える会」は以前「豊かな教育を語る会」と称して松沢研究奨励賞の研究発表の場として開催してきました。平成28年より内容と名称を変更し現在のような形にして、今回で通算29回目の開催となります。この会の大きな目的の一つは、現職を離れた皆さんと現役で学校現場で活躍している皆さんそして現役の学生さんの縦の繋がりで、教育について大いに語り合うということです。今日は前友松会副会長の

國分一哉さんも出演された映画を観た後、出演されたエピソードなども交えながら以前在籍されていた学校で実践されたお話を伺い、その後先生方からはご自身の経験や実践されたことをそして現役の学生さんは教育に関する疑問や小

中学校で経験されたこと等を大いに語り合って欲しいと思います。

この会の開催にあたり鈴木学部長はじめ教職員・学生の皆様、友松会研修部で準備を担っていただきました。また今日は他に役員、常任理事の皆さんにもお手伝いしていただいています。心より感謝いたします。

教育学部長挨拶（鈴木　俊彰　氏）

本日は三連休初日でありまた学生がほかの活動に参加していることもありこの会への学生の参加が少ないのですが、少数精鋭ということでご理解いただきたいと思います。様々なところで積極的にボランティア活動等に参加している学生たちですのでどうぞよろしくお願いいたします。教員養成については大学在学中だけでは難しいので、大学入学前から教員採用までを見通して教育委員会等とも連携しながら進めています。今日も大学入試の総合型選抜ということで多くの高校生が試験を受けに来ています。

最近の学生はボランティア活動に積極的に参加する学生が増えています。また、自分が教員になりたいということを行動で表しているように思います。教員として採用されたらすぐに一人前ということではないので、友松会の皆様や現場の皆様のあたたかいご指導をお願いしたいと思います。

第一部　映画「夢見る校長先生」鑑賞

第二部【講演会】

学校の当たり前を見直そう！

～子ども・地域・教職員のために必要なこと～

前友松会副会長・前茅ヶ崎市立香川小学校長

國分　一哉

映画の中で色々取り上げられていますが「通知表をなくした」ということで出版社の方に取材してもらって、本も書いています。

一点、私も映画を観て「違うな」と感じたところがあります。「校長が全て決めてやっていく大統領だよ」とか言っているのですが、そういう学校は嫌だなと思って校長になっていますので、香川小学校での改革は決して校長が「やれ」と言ったり「やろう」と言ったりしたことではないということです。

私たちが当たり前と思ってやってきたことは実は周りから見たらそんなことではなかった、見直してみたらいろいろ考えることもあったのではないかというところがスタートです。例年通り当たり前でやってきたことをちょっと見直してみたらどうでしょう。その辺りを考えていただけたらというところでお話をしていきたいと思います。

いきなり通知表をやめようとした話し合いがあったわけではありません。私は香川小学校に校長として異動してきました。４月当初「こういうことをやってもいいでしょうか」という職員からの質問に「皆さんがいいように考えてよければいいじゃないですか」と答えると、「本当にそれでいいのですか」というような感じでしたので、前任校とちょっと違うなと思いながら、「先生方が本当に思うならばそれをやっていきましょう」という形で進んでいきました。

その中で、児童支援部から「互いに認め合える子どもの育成を目指して１年生と６年生が隣り合う教室配置にしたい」という提案がありました。ある事情があり、１年生からずっと１階の教室（北側）で過ごしていた６年生は何となくギスギスしてトラブルの多い学年でした。そんな子たちでも１年生が隣に来ればもっと明るくいいお兄さんお姉さんになるのではないかという発想でした。私もそれを感じていました。ただし、校長提案だと何か起こった時に「校長が言ったから」となりかねないので、児童支援部にお願いしました。素直に「みんなやりましょう」と言うのかなと思っていたのですが最初に反対意見がどんどん出てきました。その後メリット・デメリットを出し合い、何度も話し合いました。本音のアンケートも取りまし

たが平行線を辿り、最終的には校長判断になりました。半分の職員が反対したこともあり、この提案は諦めました。けれど、この取組の効果を確認したい、試したいこともあり、職員の了解を得て、１階と２階に１箇所ずつ１年生と６年生が隣り合う教室配置にしました。当初の提案に賛成、積極的にやりたいという先生方を担任にし「好きにやってね」「心配なことがあっても思う存分やってみて」いうことでスタートしました。自然と子どもたちの交流が深まり、何の問題もなく1年間が過ぎました。「何で私達の隣に1年生がいないの」という子も出てきました。賛成ではなかった先生方も「来年はやってみたい」に変わっていきました。次の年は、６年生だけではなく５年生もやったらどうかという意見が出ました。私は躊躇していたのですが「私たちがやろうという気になっているのに止めるんですか」と言われ、実施することになりました。子どもたちがみるみる変わっていったこともあり、教室配置の提案は、保護者の95％（１年生は100％）が賛成という形で今も続いています。

「子どもたちを信じたらできる」という教員の成功体験が、通知表の話し合いを活発にしていきます。2020年度の改訂に向けて、今までの「通知表」は使えないから変えていこう、「どんな通知表にしたいか」「通知表なしにするなら…、通知表ありにするなら…」の比較で考えることにしました。子どもたち、保護者、私たち教員の三者で同じ方向で伸びていくにはどうしたら良いだろうかという話し合いが続いていきます。

働き方改革も含めて話し合いの時間をカットしてきている現実があるようですが、私は真剣にみんなが話し合う時間を確保するのは大事ではないかなと思っています。

結論を出す時期が来ます。

どんな通知表にしたいか（評価を伝える）

・通知表をもらって、自信がついたり、自己肯定感があがったりしてほしい
・もらった通知表を励みにして、後の学習意欲に繋がるものにした
・欠点より学習に向かう気持ちや意欲、よさを伝えていきたい
・子どもの努力、成長、頑張りが伝わる通知表にしたい　等

通知表なし　具体的な改善策

・面談で伝える。作品・テスト・ノート等を見ながら、良いところ・課題を話す
・単元が終わって、テトの実施後、この学習でできなかったことをお知らせする一言をつけて渡す
・日々の学習について、その都度、評価や様子を伝えていく
・三者面談を実施する　　等
・子どもの世界の序列、教師のラベリングになっている。等

通知表をどうするか結論を出す

・子どもたちを認め、褒めている日常がそのまま伝わるようにしていきたい！
・子どもたちの中の見えない序列をなくしたい！
・通知表のための学習からの脱却！
・私たちの授業改革！

香川小は学期末の通知表で評定を保護者に伝える

本当は、表立っては言いませんでしたが、授業改革を進めたい、働き方を何とかしたいというのが私の裏の目的でもありました。授業改革についても通知表がないということが進んでくれば自然と変わってくるのではないかという思いがありました。評価をしていかないわけではない、授業も先生が言葉かけをするのも評価、子ども同士の評価もしっかりしたものにしていきたい、そんな中で３段階の評定に振り分ける必要はないだろうし、それを保護者に伝えることではない。子どものマイナス面を伝えるのではなく、プラス面を伝えていく。保護者とともに子どものことを認め褒めていく、そんな伝え方ができないだろうかという考えです。

通知表をなくして変わったことはこの４点です。必ず聞かれるのがこの４点です。

１　教員の意識の変化は？

意識の変化はあります。ただ時間はかかります。異動してきた先生方との温度差も感じました。通知表をなくしてでもやっていこうという先生方ばかりではありませんでした。実際話し合ってやってきた先生方の授業に対する考え方子どもの見方は大きく変わっていきましたのでもっと話し合いを共有する時間をもつことが必要だったと感じています。

２　子どもの意識の変化は？

友達を色眼鏡で見ず、優しい支え合う関係ができ、多様な子どものよさが発揮できるように

なりました。「ぼくの意見をみんな聞いてくれるようになった」と話してくれる子もいました。授業中もいろいろな意見が出るようになりました。それを楽しんでくれる先生方になってくれると嬉しいと思っています。

３　保護者の意識の変化は？

通知表よりも子どもの変化が具体的に伝わっている等の声があった反面、我が子がクラス全体の中ではどうか等の心配の声もありました。賛成４割・反対５割・わからない１割という結果が出ています。

４　学校が変わったと思える場面は？≫

顕著なところでは運動会の変化があげられます。コロナ禍での運動会。順位を決める徒競走がなくなりました。子どもたちも半数以上がやりたくないという意見でした。クラスで目標、新記録達成、に向かって取り組む団体競技を中心にしました。クラスごとで工夫して練習し、運動会の時には全クラスが新記録を出しました。万歳をして帰っていく子どもたちの姿（笑顔）を見て職員も全員満足していました。ところが、徒競走がなくなったことに半数が反対というアンケート結果でした。職員は通知表で反対される以上にショックを受けました。

今の香川小学校では、「取り組んでいることはいかがですか」という問いには７割位が賛成なのですが、「通知表はほしいですか」には８割以上が「ほしい」という結果です。アンケートの質問の仕方には工夫が必要ということを学んでいるようです。校長もかわり、職員もかわります。公立学校の難しさ・話し合いを継続する難しさを感じています。子どもファーストになかなかなれない学校があります。そこで校長がどういう立場をとるかが必要なのかと思っています。

香川小学校の改革は続けてほしい。全国に広がっていくことを期待しています。行政が動かないと厳しいのかなと思いつつ、一つひとつの学校で考える、話し合える職場を作っていけばまだまだ公立学校でもいけるのかなと思っています。

香川小学校は通知表には戻っていないのですが、通知表のようなものを個人面談の時に見せてほしいと保護者が話しているようです。今の職員で話し合うと、きっと通信表はなくならない。そういうようになってしまったのは残念だなと思っています。

最後になります。想像力・創造力をつけて、校長だけでなく地域を含めて色々な方で学校運営を進めていくと楽しい学校になるのではないかと思っています。学校は自分たちで作り上げていくものだと全職員が思えたならば、学校というものは色々回っていくのかなと思います。それぞれの立場で今日の話し合いを活発に進めていただけることを望んでいます。

グループディスカッション記録まとめ(映画及び講演を受けて各グループ記録から抜粋)

○「学校のあたりまえ」に関して

- 「昔は当たり前」が現在の学校現場では通用しない。ハラスメントと誤解される。等
- 対外的なものほど変革がやりづらい。
- 当たり前にやっていることに良いことと見直すべきものがある。（子どもにとって辛い場合も）
- 「あたりまえ」が不登校を作る？
- 例年通りになる原因は「教員ファースト」
- 縦割り活動は効果がある（講演からも）
- 小学校の当たり前と中学校の当たり前に微妙な違いがある。（グループの会話が盛り上がった）
- 小中高でできることが違うのではないか。
- 子ども自身の学びを生かし、子ども主体の授業づくりを目指す。個性伸長への転換。
- 学校という枠組みをはずず。固定概念をなくし柔軟に考えていく必要がある。

○「健やかに育つ」に関して

- 自分で考え自分で行動する(経験をさせる)
- トラブルがなく成長するのではなく、さまざまな出来事を経験しながら自分らしく育つこと。
- 管理職がにこやかにして、先生たちが楽しく子どもに接することが健やかな育ちに通じる。
- 地域との協働を図る。地域にも育ててもらう。
- 「学校の主体は子ども」「子どもにとって良いことをやっていこう」と考えて取り組んだ。

・心理的安全性を大切に。手を止め目を合わす。

○「今私たちにできること」に関して

・教育について先生たちが時間をかけて考えることができる環境づくり
・「想像力・創造力」が大切なことと、子どもたちに伝える。
・校長として先生方の後押しをする意識をもつ。
・若い先生の意見を生かすこと
・授業、生活、体験の環境づくり
・何らかの形で学校現場にかかわること
・自らの経験、見識を今の現場、現役の先生方の役に立つよう働きかけていきたい。

・なんでも相談しやすいにこやかな校長になる。
・ありのままの子どもたちを見て、認める。

○その他全体で共有したいこと等

・教室配置で子ども同士が学び、成長する。
・改革は難しい。伊那小が６０年前から通知表なしを始めたのに、なぜ全国に広がらないのか。
・コミュニケーションを取ること
・経験、知識の少ない教師を、どう支え指導していくかが課題。（１年担任が朝顔の種１粒から朝顔の花１つしか咲かないと思っていて、データでインプットしたから大丈夫と言ってタブレットだけでさっさと済ませてしまう授業展開。）
・子どもをじっくりと見ることの大切さ
・子どもの思いや願いをかなえられるよう応援したいし親の理解、意識を得るよう応援したい。

《 一言感想より 》

・映画、講演会、ディスカッションを通してさまざまな話を聞けて実りのある時間となった。
・学生だが、このような先進的で子どものための取組を実践できている校長方の強い信念と問題意識に感銘を受けた。半面保護者との合意形成や責任の大きさといった内容についても話し合い、現実の課題も見えた。
・それぞれの立場での経験談も聞けて教育を語ることができ貴重な時間を過ごせた。この機会を作っていただいた友松会の皆様に感謝です。
・國分先生のお話に、とても元気、勇気をもらった。・またお話を伺いたい。・腑に落ちた。
・グループでいい話し合いができた。他市町村の様子がよく分かった。国大教育学部が神奈川の教育界をリードし、子どもの未来を創っていく原動力になってほしいと願っている。
・映画も講演もこの場だけでなく現役の学校管理職にも見て聞いてもらいたいと強く感じた。
・「豊かな教育」について具体的に話し合えた。

閉会のことば　加藤　哲三　副会長

「豊かな教育を考える会」全体まとめ

参加者の「一言感想」からこの会の様子が伝わる。「國分先生のお話、とても元気をもらいました」「映画も講演もこの場だけでなく現役の学校管理職にも見て聞いてもらいたいと強く感じた」また、ディスカッションも「様々な年齢の皆さんとディスカッションでき、大変勉強になりました」「このような先進的で子どものための取り組みを実践できている校長方の強い信念と問題意識に感銘を受けました」など、この会が有益であったとの声が多数あった。その内容として、「『通知表をなくした！』ということが大きく取り上げられがちですが、そこに至るまでの人と人が対話を繰り返すプロセスの部分や、異動したての校長に対する他の先生方の認知や反応などを感じとりながら学校運営を考えていらっしゃるというエピソードを聞くことができ、勉強になりました」「保護者との合意形成や責任の大きさといった内容についても話し合い、現実の課題も見えました」など様々な学びがあったようである。

今後に向けては、「国大教育学部が、神奈川県の教育界をリードし、子どもの未来をつくっていく原動力になってほしいと願っています。」の声にうなずきを感じる会であった。